

「の一まんじゅう」から見える沖縄

横山 由希

1. はじめに

私は今回、沖縄のお菓子をテーマに調査した。伝統菓子、輸入菓子、沖縄限定の菓子など多くの菓子が存在する中で、私が最も興味をそそられたものが「の一まんじゅう」というまんじゅうであった。白いまんじゅうに赤い「の」の字が書いてある。そもそもなぜ「の」なのであるだろうか。これをきっかけに、の一まんじゅうの発生や目的を調査し、沖縄の人々や社会とどのように関わっているのかを調査しようと思った。

2. の一まんじゅうについて

那覇市首里の盛光寺で売られている饅頭で、上面に紅で、ひらがなの「の」の字が書かれているため、通称「の一まんじゅう」でしられる。小豆あんがたっぷり入った中華饅頭に似た饅頭。注文すると、その場で「の」の字を書き、サンニンの葉で包んでくれる(『日本銘菓事典』より)。



写真1 の一まんじゅう

の一まんじゅうの正式名称は「ぎぼまんじゅう」である。現在、ぎぼまんじゅうの店舗は盛光寺敷地内ではなく、久場川町へ移転している。盛光寺から現在のぎぼまんじゅうの店舗まで行くには、道の諸所にある黄色い看板を目印に進んでいくとたどり着くことができる。ぎぼまんじゅうに売られているまんじゅうの登録商標は「のまんじゅう」であり、通称がの一まんじゅうなのは現地の人が「の」の音を伸ばしてそう呼ぶからである。年配の方々には、「の」が書かれた「の」のまんじゅうという意味で「の一の一まんじゅう」と呼ぶ人もいるそうだ。

沖縄では、みやげ物屋にある箱入りのの一まんじゅうや、スーパーにあるピンク色で書かれた「の」の字のの一まんじゅうを見かけることがあるが、それらはすべて類似品である。現地の人にはそれらに対して「の一まんじゅうの真似をしているもの」「コツをつかんでいないからおいしくない」と分別がついているようであり、ぎぼまんじゅうで売られているの一まんじゅうを支持している人々が多い。



写真2 ぎぼまんじゅうの店舗



写真3 盛光寺前にある案内板



写真4 諸所にある移転先への案内板



写真5 諸所にある移転先への案内板

の一まんじゅうの「の」の由来であるが、まんじゅうを買ったときに貰えるしおりには、「まんじゅうの由来、昔から沖縄では祝い事に「の」を書き「のし」の代わり縁起物として重宝されています、また白色は法事に使用しています。」と説明されている。の一まんじゅうの「の」は文字熨斗なのである。また、現地の人から「寿」という漢字の「寸」の部分のくずし字であるという話も聞いた。

3. の一まんじゅうとユタ

3.1 首里十二カ所巡り

の一まんじゅうは元々盛光寺の敷地内で販売されていたが、盛光寺改築のため2004年に現在の久場川町に移転した、と店の従業員は言う。現地の人の中には盛光寺住職の奥さんがの一まんじゅうを作っていたと語る人もいたが、盛光寺住職の話では、一緒に経営していたのではなく、便宜上、寺にお参りする際に供物を近くで買えるようにと敷地を貸していただけだと言う。

那覇市首里には、十二支の守り本尊に祈願するために臨済宗寺院を巡拝する「首里十二カ所巡り」と呼ばれる民間の習俗がある。家族の干支にあわせて守り本尊のある寺院に詣で、健康・安寧を祈願するのである。盛光寺はその参拝寺の一つであり、他に首里観音堂、安国寺、達磨寺がある。十二カ所巡りの手順は、自分の生まれ年の寺

のみを廻ったり、守り本尊が安置されている4つの寺を廻ったりと人ごとに一様ではなく、廻る順番でさえも決まっていないといわれている。沖縄では十二支の12年ないし12日の周期が人間の運命にとって特に重要な影響を及ぼすと考えられており、生まれ年には親類縁者を集めて盛大な祝いが行われるなど、沖縄特有の十二支の捉え方があることがわかる。

表1 十二支と守り本尊

十二支	守り本尊
子	千手観音
丑・寅	空虚蔵菩薩
卯	文珠菩薩
辰・巳	普賢菩薩
午	勢至菩薩
未・申	大日如来
酉	不動明王
戌・亥	阿弥陀如来

表2 参拝寺と十二支

参拝寺	十二支
首里観音堂	子・丑・寅・午・辰・巳
安国寺	酉
達磨寺	戌・亥・卯
盛光寺	未・申

3.2 沖縄におけるユタ

参拝寺には家族だけで祈願する場合もあれば、ユタと呼ばれる民間職能者を伴う場合もある。ユタとは、沖縄本島および広く南西諸島においてトランス（変性意識、通常意識が変化した状態）状態で託宣・卜占・祈願・治病などを行う呪術・宗教的職能者のことであり、その多くが女性である。

ユタになる者は召命型のシャーマンに共通する心身異常（巫病）体験をもつことが多い。ユタの候補者は、幼少時から身体が虚弱であったり、サーダカウマリと呼ばれる神に関わる特異な体験をもったりしながら育つことが多い。その後、夫婦や家族間の不和、家族の死、経済的失敗など何らかの個人的苦悩を経験し、これが引き金となって神ダーリィと呼ばれる心身異常に陥るのである。神に関わる夢や幻覚が多発し、沖縄の諸所にある聖地を巡って捜神を続け、先輩ユタの家を歴訪して指導を受けているうちに神と直接交流が可能になり、成巫する場合が多いという。こうしたユタを現地の方はウマリユタと呼ぶ。対してナライユタというのは、神ダーリィ体験をもたない者が修行・学習によってユタになった者のことである。

ユタの役割の多くは祭壇前で行われるハンジ（判断）である。依頼者の要望により家や個人の不運・不幸・病気などの原因を巫儀を通して判断する。ユタは、依頼者が来ると神前に線香を立て、依頼者の年齢と依頼内容を神に告げ、指示を乞う。すると神の姿が見え、声が聞こえ、その意志が線香の燃え具合に現れる。判断の方法には筮竹を用いたり、住居の向きや門構えの状態から判断したり、生まれ干支から判断する場合もある。

3.3 あるユタの事例

私が盛光寺で出会った一人のユタが、「判断＝未知を教えること」だと語ってくれた。このユタの成巫過程は明らかではないが、夫が浮気をして歩いているということを書いていたため、苦悩を経験しているといえる。判断を行うユタは諸所に存在しているらしいが、その存在場所は世間にはあまり知られておらず、人づてに聞くのだと話す。判断を依頼されると、9時から18時の間、8時間労働で判断を行う。判断が終わると、依頼者ごとに判断の内容によって2万から5万円の金額を支払ってもらうという。

ユタごとに、崇拝する神やこの世の成り立ち説明が異なるなど、その世界観は多様である。このユタは、ノロと呼ばれる村落祭祀を司る女性祭司の長や、琉球王国の最高位の女性祭司について詳しく、また琉球列島は神の島であると捉えていた。うつ病や精神病が多いのは神を悟っていないからであり、例えばどこか体の具合が悪いときには病院の他に、ユタに判断を依頼しにくる人がいるという。

盛光寺の隣にのまんじゅうの店舗があった時には、人々はそこでまんじゅうを買って、それを供物として寺にお参りしていた、とそのユタは言う。「の」の字を入れない白色のまんじゅうについては法事用とは限らず、普段のおやつとして食べる分には必要ないと話していた。

4. ユタと参拝寺

ユタとユタ買いをした依頼者は、判断を行った後日、首里十二カ所巡りをする。首里十二カ所巡りに関する参拝寺の対応は各寺とも一様ではなく、ユタへの許容度は多様である。

稲福（1995）によれば、寺院側の対応は寺院の論理・組織化の方向と相まって三様に整理できる。寺院側の論理と民間の論理のズレは認めつつも、あえてそこに関与せず許容する〈伝統並存型〉、巡拝寺としての機能を取りやめ、寺院の機能・役割をより仏教教義の側にひきつけて展開する〈純粹教義型〉、巡拝に関与する職能者を信徒として組織化する〈融合強化型〉である。

また、塩月（2003）では、告別式（葬式）・年忌供養（法事）、地鎮祭・起工式・日取り・人生相談など、従来おこなってきた仕事が現在では僧侶に奪われているとユタは感じ始めている、という。寺院側は自らの教義や論理のもとで運営しようとし、ユタは僧侶よりも霊威が高いことを強調し、自らを社会に位置づけ、活動しようとする。そこにユタと僧侶との相克が生じているのである。

4.1 首里観音堂

首里観音堂の守り本尊は子・丑・寅・牛・辰・巳であるが、ここを拝めば十二カ所巡ったことになるという見方もある。那覇波の上の護国寺には十二支すべての本尊がまつられており、ここを拝むだけでも良いという者もいるそうだ。首里観音堂は〈伝統並存型〉である。



写真6 首里観音堂外観



写真7 首里観音堂本堂



写真8 守授室



写真9 祈願の様子

4.2 安国寺

安国寺は、葬儀や告別式がある場合にはそれらを優先させるが、寺院の業務に差し支えない限り参拝を認めている。寺院の業務の大半は、葬儀、告別式、年忌などの法要であり、寺院の運営もそれにより賄われるという。首里十二カ所巡りの習俗に対しては〈伝統並存型〉であるものの、本堂にあるお参り台には「本堂には重箱は持ち込まないで下さい」という張り紙があり、それほど許容的ではないことが窺える。



写真10 安国寺外観



写真11 安国寺本堂



写真 12 守授室

4.3 達磨寺

達磨寺は 1972 年に寺院を再建するとともに信徒組織を再編し、巡拝に関与し、寺院に関わる職能者を信徒に組織したという。つまり、稲福（1995）によると、住職の考えでは、仏教や寺院の活動に強い関心をもっているのは職能者であり、そうした人々を排除するのではなく、組織化し、さらに彼らを通じて布教を広げる方向に沖縄独自の寺院のあり方をもとめられる、ということである。これは〈融合強化型〉といえる。



写真 13 達磨寺外観



写真 14 達磨寺本堂



写真 15 達磨寺で売られているお守り

4.4 万松院

万松院は元々、首里十二カ所巡りの参拝寺であった。しかし 1990 年にその機能を廃止することを決め、それまでまつっていた辰・巳の守り本尊を首里観音堂へ、卯の守り本尊を達磨寺へ遷している。稲福（1995）は、組織の強化、仏教の教義にのっとった布教、というイデオロギー強化という線上に、先の参拝寺廃止があるのではないだろうか、と指摘している。これは〈純粹教義型〉である。

他の参拝寺はこのことに関してどう受け止めているかと尋ねたところ、ある住職は、万松院は首里十二カ所巡りに対して「休憩中」とであると言っていた。首里十二カ所巡りに対応できなくなったため葬式や告別式などを主な業務とし、それによって運営を賄う方が都合が良いのだそうだ。



写真 16 万松院外観



写真 17 万松院本堂

4.5 盛光寺

〈伝統並存型〉をとる盛光寺の歴史は古く、1728 年までさかのぼると住職は話す。



写真 18 盛光寺外観



写真 19 盛光寺本堂



写真 20 盛光寺で売られているお守り



写真 21 ユタと依頼者

5. の一まんじゅうと盛光寺

盛光寺の敷地内にの一まんじゅうの店舗ができたのは 40～50 年前である、と盛光寺住職は話す。の一まんじゅうの創業は約 100 年前で、現在の 2 代目のおばあさんで約 50 年の歴史をもっているということから、2 代目から盛光寺の敷地内で販売していたと考えられる。

5.1 供え物としてのまんじゅう

4つの参拝寺に共通していることは、それぞれの干支のお守りが販売されていること、また本堂内にお参り台があること、が挙げられる。お参り台の上には酒や米の入れ物が置いてある。これは参拝の際の供物に関係している。供物には、ピンシーと呼ばれる花米と御酒のセット、お菓子、果物、線香、ウチカミ（紙銭）などが一般的である。祈願が終わった後、ここに使った花米と御酒を捨てていくのである。



写真 22 供え物(中央)と線香(右上)

まんじゅうも供物の一つである。寺には山号があり、江戸時代、寺で用いる菓子のことを山に供えるという意味で「山菓子」と呼ぶようになった。山菓子といえばまんじゅうと相場が決まっています、現在でも仏事にまんじゅうを用いるのはその遺風である。参拝している人々の供物の様子を見てみると、3個ずつ重ねたまんじゅうもしくは白いもちを3組、合計9個供えている場合が多かった。の一まんじゅうも盛光寺敷地内にあった頃はこのような使われ方をしていたようである。

6. 沖縄におけるの一まんじゅうの位置づけ

6.1 首里の寺と菓子屋

首里十二カ所巡りの参拝寺の周辺を歩いていると、沖縄の伝統菓子、餅菓子、まんじゅうなどを売る店が点在していることに気付く。これは、沖縄における菓子が供え

物としての特色が強いためではないかと考えた。



図1 首里十二カ所巡り参拝寺と菓子屋

6.2 沖縄の菓子文化

沖縄には伝統菓子が多数存在し、那覇の市場にもよく売られている。中でも市場本通りは通称「お菓子通り」と呼ばれ、伝統菓子を守る店が6軒ほど近接していることから、沖縄特有の菓子文化が窺える。沖縄の伝統菓子は仏壇への供え物としての需要が高く、また年中行事で使用したり、祝いの席でご馳走と一緒に振舞われたり、そのお返しとしても使用されているようだ。



写真 22 お菓子通りで売られる菓子



写真 23 平和通りにある菓子屋

琉球王朝時代にまで遡ると、伝統菓子は王家や貴族などの高貴な人々にしか口にできないものであった。しかし近世になると庶民にも伝わるようになり、伝統菓子は行事や儀式など特別なときに食べる菓子へと変化してきたのである。貴族の家には『菓子例帳』というものがあり、祝儀用、法事用に区別され、作り方・材料・分量・色・燃料などが詳しく記されていたようである。

金楚糕（ちんすこう）で有名な「本家新垣菓子店・新垣カミ菓子店」は琉球王府の包丁役（台所奉行）であった新垣筑登之親雲上淑規を始祖としているため、首里城下に店を構えている。また、そこに売られている鶏卵糕（ちいるんこう）という伝統菓子は、琉球貴族の祝祭用の供え物として使用されていたという。鶏卵糕の他にも、「中村製菓」に売られている光餅（くんぺん）や、闘鶏餃（たうちいちゃう）なども祝祭用の供え物であった。

また、沖縄では法事を「焼香」といい、ここに沖縄独特のしきたりや風習があるが、焼香の盛り菓子という特別なものはない。盛り菓子には、コー菓子と呼ばれる落雁、李桃餅（りとうぺん）と呼ばれる桃菓子、鶏卵糕、金楚糕、闘鶏餃、吉野餅、丁字餅、羊羹、藤さらさ、花ボールなどがある。これらを大々的に器に盛って仏壇に供え、来客にはその菓子を下げ、土産にさせるのである。四十九日までの法事や年忌は本土と同じであるが、沖縄では死後 33 年経つと初めて親元祖の神と一体になると考えられているため、三十三回忌は祝いの行事とされている。それゆえ供物は祝儀と同様、赤い落雁、赤く染めた桃菓子、赤い餅など、赤い菓子や料理も赤いものが用いられるそうだ。

6.3 沖縄の菓子文化の中の「のまんじゅう」

沖縄の伝統菓子はこのように、慶弔用であることがわかる。このことから、のまんじゅうにおいても、「の」の字を入れる場合には祝儀用、入れない場合には法事用と用途が分けられていることに合点が行く。なぜ赤色で「の」の字が書かれているのかということについても、一般的に赤色は呪力の備わった厄除けの色であるが、祝儀の場合に赤色の食べ物を供物とする沖縄では、赤色がより神聖なイメージが強いことが窺える。

さらに首里は、泡盛が有名なことで知られるように、琉球王朝時代から酒蔵の町として栄えていた。琉球菓子は中国菓子和日本菓子を融合して生まれた菓子であり、菓子に関わる先人たちは中国との国交貿易により酵母を菓子作りに利用していたという。「中村製菓」には「首里まんじゅう」というまんじゅうが売られているが、これはその時代を想い、ゆいレール開通を記念し、現代の食材を使って復刻したものである。酒まんじゅうを作る文化があったこと、また、中国菓子の影響により小麦粉を使用した蒸しまんじゅうが作られたことも、のまんじゅうが生まれた由来のひとつではないだろうか。

7. おわりに

の一まんじゅうについて主に調査してきたが、それを通して民間の習俗、文化、地理など様々な視点から沖縄を見ることができた。沖縄では、菓子の人々の生活に根強く結びついていると感じる。私が住んでいる秋田にも銘菓と呼ばれる菓子はあがあるが、行事と直接結びついているようなものはそう存在していないと思われる。また、私にとって「参拝」「祈願」といえば神社のイメージが強く、首里十二カ所巡りという習俗に対しては異質の文化という感じを受ける。沖縄独特の菓子文化があること、本土とは違った信仰の形態があることなどが交ざり合い、そこにの一まんじゅうは存在しているのである。

参考文献

- 池上良正（1992）『民俗宗教と救い—津軽・沖縄の民間巫者—』淡交社
- 稲福みき子（1995）「首里十二カ所巡りにみられる宗教の重層構造—寺院の組織化と民間宗教—」琉球大学教養部（編）『復帰 20 年 沖縄の政治・社会変動と文化受容』
- 沖縄大百科事典刊行事務局（編）（1983）『沖縄大百科事典 上・中・下』沖縄タイムス社
- 「沖縄を知る事典」編集委員会（編）（2000）『沖縄を知る事典』紀伊國屋書店
- 亀井千歩子（1996）「日本の菓子 祈りと感謝と厄除けと」東京書籍
- 塩月亮子（2003）「シャーマニズムの変貌—世界観の現代化—」池嶋洋次（編）『地球文化創造 アジア遊学№53』勉誠出版
- 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄（編）（2006）『精選 日本民俗辞典』吉川弘文館
- 本多由紀子（編）（1995）『老舗饅頭』小学館
- 山本候充（2004）『日本銘菓事典』東京堂出版

地図

「Yahoo!Japan 地図情報」<http://map.yahoo.co.jp/>